10/3 Thu.

第676回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 676 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）*–p.6*
SEBASTIAN WEIGLE

ピアノ
Piano
黒木雪音 *–p.9*
YUKINE KUROKI

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

武満 徹
TAKEMITSU
3つの映画音楽［約12分］*–p.11*
Three Film Scores
I. 訓練と休息の音楽
——『ホゼー・トレス』（勅使河原宏監督、1959年）より
II. 葬送の音楽——『黒い雨』（今村昌平監督、1989年）より
III. ワルツ——『他人の顔』（勅使河原宏監督、1966年）より

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23［約32分］*–p.12*
Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23
I. Allegro non troppo e molto maestoso – Allegro con spirito
II. Andantino semplice
III. Allegro con fuoco

［休憩］
[Intermission]

チャイコフスキー
TCHAIKOVSKY
交響曲 第4番 ヘ短調 作品36［約44分］*–p.13*
Symphony No. 4 in F minor, op. 36
I. Andante sostenuto – Moderato con anima
II. Andantino in modo di canzona
III. Scherzo: Pizzicato ostinato. Allegro
IV. Finale: Allegro con fuoco

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

10/9 Wed.

第642回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 642 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Conductor
セバスティアン・ヴァイグレ（常任指揮者）*–p.6*
SEBASTIAN WEIGLE

ヴァイオリン
Violin
クリスティアン・テツラフ *–p.9*
CHRISTIAN TETZLAFF

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster
日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

伊福部昭
IFUKUBE
舞踏曲〈サロメ〉から“7つのヴェールの踊り”
［約13分］*–p.14*
'Dance of the Seven Veils' from "Salome"

ブラームス
BRAHMS
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77［約38分］*–p.15*
Violin Concerto in D major, op. 77
I. Allegro non troppo
II. Adagio
III. Allegro giocoso, ma non troppo vivace

［休憩］
[Intermission]

ラフマニノフ
RACHMANINOFF
交響曲 第2番 ホ短調 作品27［約60分］*–p.16*
Symphony No. 2 in E minor, op. 27
I. Largo – Allegro moderato
II. Allegro molto
III. Adagio
IV. Allegro vivace

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

11/17 Sun.

第137回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール　14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.137 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮 Conductor
ロバート・トレヴィーノ *–p.7*
ROBERT TREVIÑO

チューバ Tuba
ジーン・ポコーニ *–p.10*
GENE POKORNY

コンサートマスター Concertmaster
戸原 直
NAO TOHARA

レスピーギ RESPIGHI
交響詩〈ローマの噴水〉［約15分］*–p.18*
Fontane di Roma
I. 夜明けのジュリアの谷の噴水－II. 朝のトリトーネの噴水－III. 昼のトレヴィの噴水－IV. 黄昏のメディチ家の噴水

ラロ・シフリン SCHIFRIN
チューバ協奏曲（日本初演）［約15分］*–p.19*
Concerto for Tuba and Orchestra (Japan Premiere)
I. Andante Animato
II. Andantino
III. Allegro Molto

［休憩］
[Intermission]

レスピーギ RESPIGHI
交響詩〈ローマの祭〉［約24分］*–p.20*
Feste Romane
I. チルチェンセス－II. 五十年祭－III. 十月祭－IV. 主顕祭

レスピーギ RESPIGHI
交響詩〈ローマの松〉［約23分］*–p.21*
Pini di Roma
I. ボルゲーゼ庭園の松－II. カタコンブの傍らの松－III. ジャニコロの丘の松－IV. アッピア街道の松

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：横浜みなとみらいホール

11/23 Sat.

第271回 土曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No. 271 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

11/24 Sun.

第271回 日曜マチネーシリーズ
東京オペラシティ コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No. 271 / Tokyo Opera City Concert Hall 14:00

指揮 Conductor
ジャン＝クロード・カサドシュ *–p.8*
JEAN-CLAUDE CASADESUS

ピアノ Piano
田所光之マルセル *–p.10*
MARCEL TADOKORO

特別客演コンサートマスター Special Guest Concertmaster
日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

プローブスト PROBST
〈群雲〉（日本初演）［約9分］*–p.22*
"Nuées" (Japan Premiere)

ラヴェル RAVEL
ピアノ協奏曲 ト長調［約23分］*–p.23*
Piano Concerto in G major
I. Allegramente
II. Adagio assai
III. Presto

［休憩］
[Intermission]

ベルリオーズ BERLIOZ
幻想交響曲 作品14［約49分］*–p.24*
Symphonie fantastique, op. 14
I. 夢と情熱
II. 舞踏会
III. 野の情景
IV. 断頭台への行進
V. ワルプルギスの夜の夢

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））
独立行政法人日本芸術文化振興会

10/3 名曲

10/9 定期

Maestro

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ
（常任指揮者）

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

雄大なサウンド ラフマニノフ＆ チャイコフスキー

©読響

10月に同プログラムを携えて読響と欧州ツアーへと旅立つドイツの名匠ヴァイグレが、ドイツ音楽と同様に力を注ぐロシア音楽で豊潤かつ力強いサウンドを引き出し、壮大な世界を描き出す。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴び、04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年夏までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務め、在任期間中には同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ボリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエングリン〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。今年4月には東京・春・音楽祭での〈エレクトラ〉を成功に導き、7月にはバイエルン国立歌劇場での〈タンホイザー〉で絶賛された。これまでに、バイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭のほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。

11/17 横浜マチネー

Maestro

指揮

ロバート・トレヴィーノ

ROBERT TREVIÑO, Conductor

迫力満点！ 俊英が振る 〈ローマ三部作〉

©Mats Bäcker

ロンドン響やミュンヘン・フィルなどを振り、欧州で活躍の場を広げる俊英トレヴィーノが、レスピーギの〈ローマ三部作〉でその手腕を発揮する。

1984年にメキシコ系アメリカ人として生まれ、テキサス州で幼少期を過ごす。ジンマンやティルソン・トーマスに師事。タングルウッド音楽祭などで研鑽（けんさん）を積み、2009年から11年までニューヨーク・シティ・オペラの、11年から15年までシンシナティ響のアソシエイト・コンダクターを務めた。13年にボリショイ劇場でシナイスキーの代役で指揮した〈ドン・カルロ〉の成功で一躍脚光を浴びた。

2017年からバスク国立管の音楽監督を、21年からRAI国立響の首席客演指揮者を務めている。これまでにロンドン響、ミュンヘン・フィル、ウィーン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、バンベルク響、クリーヴランド管、デトロイト響、パリ管、フランス国立管、ミラノ・スカラ座フィル、南西ドイツ放送（SWR）響、ローマ・サンタ・チェチーリア管、N響などに客演。ワシントン国立オペラでは〈エフゲニー・オネーギン〉を、チューリヒ歌劇場では〈カルメン〉と〈トゥーランドット〉を、フェニーチェ歌劇場では〈ドン・ジョバンニ〉を、ビルバオのアリアーガ劇場ではルディ・シュテファン〈最初の人類〉を指揮するなど、シンフォニーとオペラで活躍の場を広げている。現代作品にも精力的に取り組んでおり、ジョン・アダムズ、フィリップ・グラス、グバイドゥーリナ、アンドレ・プレヴィン、ジョージ・ウォーカー、ジェニファー・ヒグドンらの新作の委嘱や初演を手がけた。読響初登場。

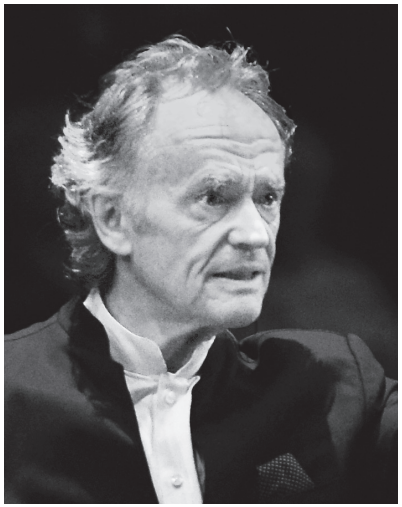
11/23
土曜マチネー
11/24
日曜マチネー
Maestro

指揮

ジャン＝クロード・カサドシュ

JEAN-CLAUDE CASADESUS, Conductor

なんと鮮やかで
美しい響き
究極の〈幻想〉



©Ugo Ponte

フランスの真の伝統を今に受け継ぐ88歳の巨匠カサドシュが、ベルリオーズの〈幻想交響曲〉などを取り上げ、色彩豊かなサウンドを響かせて会場を熱狂へと誘う。

1935年生まれ。デルヴォーとブーレーズに師事。1965年にシャトレ座音楽監督、69年にパリ・オペラ座およびオペラ・コミック座常任指揮者に就任。69年からフランス国立ロワール管の創設に関わり、同管弦楽団の監督補佐を76年まで務めた。同年には、リール国立管を設立し、音楽監督としてフランス屈指のオーケストラに育て上げた。

パリ管、フランス国立管、ベルリン・コンツェルトハウス管、フィラデルフィア管、サンクトペテルブルク・フィル、モントリオール響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィルなど世界各地の楽団に客演。モンテカルロ、トリエステ、エクサンプロヴァンス、オランジュ、パリ、アントワープ等でオペラも指揮した。

リール国立管とは30枚以上のCDを録音してリリース、近年ではR. シュトラウス〈英雄の生涯〉、マーラー〈交響曲第2番〉〈大地の歌〉などがいずれも好評を博している。著書に『心から心への一番の近道』、『ある人生の譜』がある。

フランス共和国レジオン・ドヌール勲章コマンドゥールや同芸術文化勲章コマンドゥール、オランダ王国オレンジ・ナッソー勲章コマンダー、ベルギー王国レオポルド勲章オフィシエなどを受章。ピアニストのロベール・カサドシュは伯父にあたる。2002年3月以来、2度目の登場。

10/3
名曲
Artist

ピアノ

黒木雪音

YUKINE KUROKI, Piano

ダブリン国際コンクールで優勝した話題の新星。1998年千葉県生まれ。幼少期より江口文子に師事。昭和音楽大学卒業および同大学修士課程修了。2022年にはダブリン国際のほか、リスト国際コンクール（ユトレヒト）でも優勝。23年にはルービンシュタイン国際コンクールで第3位に入賞するなど受賞歴多数。7歳でオーケストラと初共演して以降、イスラエル・フィル、オランダ放送フィル、リトアニア国立響、アイルランド国立響、東京響、東京フィル、神奈川フィル、東京シティ・フィルなどの楽団と共演。リトアニアのヴィルニュス・ピアノ・フェスティバルなどの国際音楽祭に招かれるほか、コンサート活動も精力的に展開している。18年「パデレフスキ ピアノ名曲集」（NAXOS）に参加、ピアノ・ソナタを録音した。千葉市芸術新人賞、千葉県教育奨励賞などを受賞。読響初登場。

10/9
定期
Artist

©Giorgia Bertazzi

ヴァイオリン

クリスティアン・テツラフ

CHRISTIAN TETZLAFF, Violin

現代最高のヴァイオリニストの一人。1966年ドイツのハンブルク生まれ。古典派から現代作品まで幅広いレパートリーに精通し、革新的な室内楽プロジェクトやバッハのソロ作品の演奏で高い評価を得ている。チェリビダッケ、ハイティンク、マゼール、マズア、ドホナーニ、ラトル、サロネン、ナガノ、メッツマッハー、ネルソンスら巨匠の指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ニューヨーク・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響などと共演を続けている。録音・受賞も数多く、2022年のブラームスとベルクの協奏曲の録音も絶賛された。室内楽でも活躍し、世界各地の著名ホールで演奏している。ドイツのヴァイオリン製作者ペーター・グライナーが製作した楽器を使用。読響初登場。

11/17
横浜マチネー
Artist

©Todd Rosenberg

チューバ

ジーン・ポコーニ

GENE POKORNY, Tuba

チューバ界の神のような存在とされる重鎮。1953年カリフォルニア州生まれ。イスラエル・フィル、ユタ響、セントルイス響、ロサンゼルス・フィルの首席奏者を歴任し、89年からシカゴ響の首席を務めている。2023年6月には、シカゴ響の定期演奏会でムーティの指揮でシフリンの協奏曲を演奏し、絶賛された。ロサンゼルスでは『ジュラシック・パーク』や『逃亡者』などの映画のサウンドトラックにも参加。音楽祭でのレッスンや世界各地でソロ・リサイタルを開催している。ソロ・アルバムのほか、ローリング・ストーンズのトロンボーン奏者マイケル・デイヴィスのCD録音にも参加するなど幅広く活躍。現在はルーズベルト大学、ノースウェスタン大学などで後進の指導にあたる。鉄道マニアとしても知られる。読響初登場。

11/23
土曜マチネー
11/24
日曜マチネー
Artist

サンタンデール国際コンクールで第3位入賞に輝くなど国際的に注目を浴びる新鋭。1994年、フランス人の母と日本人の父のもとに生まれ、愛知県で育つ。高校卒業後に渡欧し、パリ国立音楽院を卒業、同音楽院の修士課程を修了。その後、パリのエコール・ノルマル音楽院で奨学生として研鑽（けんさん）を積む。エリザベート王妃国際コンクールのセミ・ファイナリスト、モントリオール国際音楽コンクールのファイナリストのほか、2022年ヴァン・クライバーン国際コンクール審査員長特別賞を受賞。ウラル・フィル、フォートワース響、ブリュッセル・ワロン王立室内管などと共演。今年8月のNHK名古屋青少年響との共演がNHK・Eテレで放映されて話題を呼んだ。独創的な解釈とプログラミングに定評がある。パリ在住。読響初登場。

©Shigeto Imura

ピアノ

田所光之マルセル

MARCEL TADOKORO, Piano

10/3
名曲
Program Notes

武満 徹
3つの映画音楽

武満徹（1930〜96）は、20世紀後半の日本を代表する作曲家。ストラヴィンスキーが絶賛した〈弦楽のためのレクイエム〉（1957）によって一躍有名になり、〈ノヴェンバー・ステップス〉（1967）などが海外で初演され、国際的な名声を確立した。世界の最前線で活躍するほか、商業音楽も手がけ、約100本の映画音楽、多数の劇音楽やラジオ・ドラマの音楽を残した。

1995年3月、武満は、スイスのグシュタードで開催された「シネミュージック・フェスティバル」にテーマ作曲家として招待された。〈3つの映画音楽〉は、そのフェスティバルで演奏するために作られ、自身が手がけた3本の映画音楽から選び、弦楽オーケストラ用に編曲、それぞれにタイトルを付した。

第1曲「訓練と休息の音楽」は、勅使河原宏監督が、ニューヨークの下町に住むプエルトリコ出身の駆け出しのボクサーを追ったドキュメンタリー映画『ホゼー・トレス』（1959年）に基づく。テーマ音楽は、「訓練の音楽」をもとに作られ、低弦のピッツィカートにのって、ブルース調のスウィングする旋律が現れる。続く「休息の音楽」は、リングを離れて恋人と過ごす場面。優しい表情をみせる。

第2曲「葬送の音楽」は、井伏鱒二の同名の小説を原作とした今村昌平監督の『黒い雨』（1989年）から。原爆によって人生が大きく変わってしまった家族を描いた映画のテーマ音楽は、悲しみがうねる、祈りの音楽である。

第3曲「ワルツ」は、勅使河原宏監督の『他人の顔』（1966年）のテーマ音楽として書かれた。安部公房の同名の小説を原作とする映画は、事故により顔面に火傷を負い、顔を失った男が、精巧な仮面を作って他人に成りすまし、奇妙でシリアスな物語。武満の「ワルツ」は、哀しくも美しい。本作で武満は、第21回毎日映画コンクール音楽賞を受賞した。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1994〜95年／初演：1995年3月9日、スイス、グシュタード／演奏時間：約12分
楽器編成／弦五部

チャイコフスキー
ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23

楽曲冒頭の壮麗かつエネルギッシュな音楽とダイナミックな独奏ピアノは、誰もの心を一瞬にして摑(つか)むだろう。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840〜93）のピアノ協奏曲第1番は、1874年にわずか2か月で草稿が書き上げられた。モスクワ音楽院初代院長のニコライ・ルビンシテインに捧げようと、チャイコフスキーはその年のクリスマスに彼のもとに作品を持参するが、「支離滅裂で不器用に書かれている」と酷評され、深く傷ついた。それでも修正はせず、翌年2月にオーケストレーションを完成させ、指揮者で名ピアニストのハンス・フォン・ビューローに相談する。ビューローは作品を絶賛し、10月のアメリカ・ツアー中にボストンでビューローのピアノによって初演され、大成功を収めた。その後、多くの修正や改訂が施され、現在演奏される版となった。例えば、冒頭の独奏ピアノの右手の和音が、当初より1オクターブ高く置かれたのもそのひとつである。改訂によって、力強さと輝かしさがさらに増した。

第1楽章　アレグロ・ノン・トロッポ・エ・モルト・マエストーソ、変ロ短調、3/4拍子〜アレグロ・コン・スピーリト、4/4拍子　堂々とした長大な序奏に続いて、ソナタ形式の主部では、独奏ピアノによる細かく動くウクライナ民謡に基づいた第1主題、木管楽器による第2主題が示される。独奏ピアノの魅力が発揮される二つのカデンツァを含む展開部を経て、再現部では長大なカデンツァが披露される。

第2楽章　アンダンティーノ・センプリチェ、変ニ長調、6/8拍子　夢見るような甘美な主部に対して、独奏ピアノで始まる中間部（プレスティッシモ、ヘ長調）ではフランスの流行歌の引用がヴィオラとチェロに現れる。

第3楽章　アレグロ・コン・フオーコ、変ロ短調、3/4拍子　序奏に続き、ウクライナ民謡に基づくロンド主題が独奏ピアノで示される。さらに歌心に溢(あふ)れる副主題や新しい主題が加わり、最後は迫力のコーダ（変ロ長調）で結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1874〜75年／初演：1875年10月25日、ボストン／演奏時間：約32分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー
交響曲 第4番 ヘ短調 作品36

チャイコフスキーの交響曲第4番は、作曲家人生最大の危機とされる結婚騒動があった1877年から翌年にかけて作曲された。騒動の影響で精神は衰弱したものの、創作活動はきわめて充実していた。

「わが最良の友に」と献呈の辞が付された交響曲第4番は、亡くなった大富豪の妻メック夫人に捧げられた。二人は、メック夫人がチャイコフスキーにいくつかの編曲を依頼したことをきっかけに知り合い、76年末から、手紙だけの、奇妙な付き合いが始まった。夫人から莫大な経済支援を受けたが、直接会うことはなく、膨大な往復書簡だけが残された。そこには楽曲の内容や心情が細かく記され、今日ではチャイコフスキーの創作状況や心の内側を伝える貴重な資料となっている。

第1楽章　アンダンテ・ソステヌート、ヘ短調、3/4拍子〜モデラート・コン・アニマ、9/8拍子　チャイコフスキーが「運命の動機」としたファンファーレが鳴り響く。主部は、憂鬱な感情に満ちた第1主題、クラリネットから始まる軽やかな第2主題が示される。2つの主題がドラマティックに展開され、ソナタ形式の節目でファンファーレが異様な緊張を伴って現れる。

第2楽章　アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ、変ロ短調、2/4拍子　鄙(ひな)びた旋律がオーボエで奏される。中間部（ピウ・モッソ）は歯切れがよく、憂鬱な気分もいくらか晴れる。

第3楽章　スケルツォ：ピッツィカート・オスティナート：アレグロ、ヘ長調、2/4拍子　終始ピッツィカートで奏される弦楽器、素朴な木管合奏、弱音の金管主体の行進曲が対比させられる。作曲者によれば「気まぐれなアラベスク」。

第4楽章　フィナーレ：アレグロ・コン・フオーコ、ヘ長調、4/4拍子　激烈なロンド主題、ロシア民謡に基づく主題、陽気な主題が交互に現れる。最後は冒頭の「運命の動機」による威嚇をこれらの主題で一掃し、圧倒的な力で突き進む。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1877〜78年1月9日／初演：1878年2月22日、モスクワ／演奏時間：約44分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

伊福部昭
舞踊曲〈サロメ〉から“7つのヴェールの踊り”

伊福部昭（1914〜2006）は太平洋戦争敗戦からの約10年、とりわけ充実した活動を繰り広げた。1946年に東京音楽学校の作曲講師に就任し、多くの弟子を育てる。『管絃楽法』を執筆し、出版に向け作曲実践を言語化していく。映画音楽の仕事を始めたのもこのころ。諸ジャンルに積極的に取り組み、その歩みを1954年、代表作のひとつ〈シンフォニア・タプカーラ〉でいったん総括する。

作曲家はその充実した期間にあたる1948年、バレエ音楽〈サロメ〉を生み出す。舞踊家の貝谷八百子が、自身のバレエ団の創立10周年記念公演のために、伊福部に作曲を委嘱した。

物語の源泉はオスカー・ワイルドの戯曲だ。ユダヤの領主ヘロデは、宮殿に預言者ヨカナーンを幽閉している。ヘロデの継娘サロメはヨカナーンに興味を抱く。7つのヴェールをまとったサロメは、それをひとつひとつ脱ぎ捨てていく官能的な舞でヘロデの気をひく。ヘロデが褒美を取らせようとサロメに何が欲しいか尋ねる。サロメが所望したのはヨカナーンの首だった……。

このバレエ音楽の楽譜はいつしか行方不明になっていた。1980年代にそれが見つかる。この発見を機に1987年、作曲者自身がバレエ音楽を演奏会用の舞踊曲へと改編した。これは、新星日本交響楽団の第100回定期演奏会に供するため。バレエ上演の制約から解放された伊福部は、楽曲の規模を拡大し、管弦楽を巨大化する。

“7つのヴェールの踊り”は上述の通り、サロメの官能的な舞のシーンを描写する。アルトフルートのソロで第1の舞踊が始まる。ソロはやがて他の管楽器へ。第2の舞踊だ。管弦楽が力強くリズムを刻みだすと第3の舞踊。第4の舞踊では蛇行するような旋律を重ねる。腰を落ち着かせて第5の舞踊に入ったのち、第6の舞踊で勢いを取り戻したダンスは、徐々に熱狂の度合いを高める。第7の舞踊で力強さを増し、狂騒のうちに曲を閉じる。　〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1948年（バレエ版）、1987年（演奏会版）／初演：1948年5月29日、東京（バレエ版）、1987年5月15日、東京（演奏会版）／演奏時間：約13分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トムトム、キューバン・ティンバレス、コンガ）、ハープ、弦五部

ブラームス
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品77

ヨハネス・ブラームス（1833〜97）は、友人ヨーゼフ・ヨアヒム（1831〜1907）とともに、ヴァイオリン協奏曲を作り上げた。ヨアヒムは19世紀後半に活躍したヴァイオリニストだ。

ブラームスがこの卓越した演奏家と出会ったのは1853年。ヨアヒムはブラームスの作品を聴き、ブラームスはヨアヒムの演奏を聴いて相互に理解を深め、親しく交わるようになった。作曲家はヴァイオリニストの22歳の誕生日を祝い、半ば冗談で〈偉大なヨアヒムを称える讃歌〉を書いたことさえある。両者の打ち解けた関係が、その後の曲作りにも活（い）きている。

1878年8月、ブラームスはヨアヒム宛の手紙に、協奏曲の構想を書き付けた。作曲家は独奏声部の楽譜の一部を送り、演奏家に助言を求めている。ここから二人三脚の協奏曲創作が始まった。

当初、4楽章構成を志向していたブラームスは秋ごろ、アダージョとスケルツォを書き進めるが、しばらくしてスケルツォを取り下げた。両端楽章とアダージョ（別稿）の3楽章を12月に脱稿。その楽譜をベルリンのヨアヒムに送る。作曲者のピアノ（管弦楽パート）とヨアヒムの独奏による試演を経て、翌月1日に初演をおこなった。

第1楽章　ソナタ形式。中音域以下のパートが第1主題を弾く。当時の批評家エドゥアルト・ハンスリックは、分散和音風に上下するメロディを、ベートーヴェンの〈英雄〉と並べて論じている。第2主題は大きく跳躍する旋律線を第1主題と共有するも、半音進行によって優美さを纏（まと）う。

第2楽章　三部形式。オーボエの主題が印象的。中間部はヴァイオリンの独擅場で、広い音域を丁寧に“縫い進む”様子が美しい。

第3楽章　ロンド・ソナタ形式。ロマ音楽風の主題の間を埋めるエピソードの多様性が面白い。かど張った重音、バネのある跳躍、なめらかな音階を前面に押し出し、独奏ヴァイオリンのさまざまな魅力を明らかにする。　〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1878年／初演：1879年1月1日、ライプツィヒ／演奏時間：約38分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ラフマニノフ
交響曲 第２番 ホ短調 作品27

1804年から14年にかけて、ベートーヴェンは「傑作の森」と称される時期を過ごす。ミサ、オラトリオ、オペラ、交響曲、管弦楽曲、室内楽曲、ピアノ独奏曲と、ありとあらゆる分野に健筆を振るった。その「傑作の森」から100年、モスクワとドレスデンとを行き来しつつ、新たな「森」を繁茂させる作曲家がいた。セルゲイ・ラフマニノフ（1873〜1943）だ。

ラフマニノフは1904年から、モスクワ・ボリショイ劇場の指揮者としてオーケストラ・ピットに入り、1906年の初めには自作の二つのオペラを自らの指揮で初演した。しかし、その直後の2月、ロシアの政情不安を理由に同劇場を辞し、外国に活躍の場を求める。

ドイツに渡りドレスデンに家を借りた1906年からの３年間は、毎年数か月、同地に留まり、作曲に専念する生活を送る。その間、〈15の歌曲〉やピアノソナタ第1番、交響詩〈死の島〉など、今も演奏会のプログラムに上がる作品群を生み出していく。実際、「何日も朝から晩まで作曲し、心は燃えている」と本人が手紙に書くほど、創作意欲は高まっていた。

そんな、ラフマニノフの「傑作の森」の中心に立つ大樹こそ、交響曲第２番ホ短調である。作曲は1906年から07年。ドレスデンでの作業の多くをラフマニノフは、この作品に捧げた。

第1楽章　低弦パートによる“坂を登って降りて足踏みする”ような旋律（A1）で序奏が始まる。この旋律が楽章を超えて作品全体を束ねるかすがいの役目を果たす。当然、主部でも主題となる。**第２楽章**　聖歌〈怒りの日〉に触れたのち、第1楽章とは“ステップ”を踏み替え、異なる趣向でＡのテーマ（A2）を響かせる。**第３楽章**　A1の前半部分にあたる“登って降りる”主題（A3）と、A1とを同時進行させる。**第４楽章**　第２楽章と同様のステップで、A2を繰り返す。やがて前楽章の同時進行（A3＋A1）を回顧する。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1906〜07年／初演：1908年1月26日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約60分
楽器編成／フルート３（ピッコロ持替）、オーボエ３（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、グロッケンシュピール）、弦五部

レスピーギ
交響詩〈ローマの噴水〉

オットリーノ・レスピーギ（1879〜1936）は、ボローニャでヴァイオリンとヴィオラ、作曲を学んだのち、サンクトペテルブルクの歌劇場でヴィオラ奏者を務めた。作曲については、マルトゥッチに師事。また、リムスキー=コルサコフにも学び、彼の色彩豊かなオーケストレーションに影響を受けた。また、ドビュッシーからの示唆も感じられる。

交響詩〈ローマの噴水〉は、〈ローマの松〉と〈ローマの祭り〉とともに〈ローマ三部作〉と呼ばれている。イタリア・ルネサンスやバロックの音楽の研究者でもあったレスピーギは、ローマの歴史とイタリア音楽の古い様式を融合し、同時にフランス印象派の影響を受けながら、これら3つの交響詩を書き上げた。

〈ローマの噴水〉は1916年完成。夜明けから日没までのなかで、ローマにある4つの噴水が音楽によって描かれている。

I. 夜明けのジュリアの谷の噴水　第2ヴァイオリンの細やかに揺れ動く様子や、オーボエが歌うメロディ、鳥の鳴き声のようなサウンドなど、静けさにたたずむ牧歌的な風景が目の前に浮かぶ音楽。

II. 朝のトリトーネの噴水　バルベリーニ広場にあるベルニーニの作った彫像にインスピレーションを得た音楽で、海神ネプチューンの息子トリトンと水の精が戯れる様子が表されている。冒頭のホルンは、トリトンが奏でるほら貝の響きを模している。

III. 昼のトレヴィの噴水　トレヴィの噴水には、海馬のひく戦車に乗ったネプチューンの銅像がある。エネルギーに満ちた音楽は、力強いネプチューンを描き出しているかのようである。荘重な主題は、クラリネット、ファゴット、ホルンによって奏でられる。

IV. 黄昏のメディチ家の噴水　レスピーギによると、「メディチ荘の噴水は物悲しい主題で始まる。」その主題は、フルートとイングリッシュ・ホルンによって奏される。たそがれの雰囲気や鳥のさえずり、葉が風に揺れる情景など、印象派的な終曲。

〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1915〜16年／初演：1917年3月11日、ローマ／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル、鐘、グロッケンシュピール）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、オルガン、弦五部

ラロ・シフリン
チューバ協奏曲（日本初演）

ラロ・シフリン（1932〜）はアルゼンチン出身。幼いころからピアノを習い、ダニエル・バレンボイムの父エンリケにも師事。のちにパリへ渡り、メシアンやケクランのもとで研鑽（けんさん）を積んだ。パリから帰国後は、ジャズ・バンドで活躍し、のちにアメリカへ移住。「燃えよドラゴン」などの映画音楽も手掛けるようになる。また、TVドラマの「スパイ大作戦」の音楽は、1968年にグラミー賞を受賞した。

シフリンは、クラシック音楽の作曲も続けている。1965年には、ハイフェッツとピアティゴルスキーのために二重協奏曲を作曲。本日演奏される〈チューバ協奏曲〉は、シカゴ響のチューバ奏者ジーン・ポコーニを念頭に2018年に書き上げられた。彼はこの創作の中で、「さまざまな発見をした」と語っている。この作品で、彼はジャズやポピュラー音楽のエッセンスと、クラシック音楽の表現を融合している。

第1楽章　アンダンテ・アニマート　チューバ独奏は、ニ短調の主要主題を堂々と示す。続いて、オーボエや第1ヴァイオリンなどが新しいメロディを歌う。そのメロディは、オーケストラ・パートで用いられたモチーフをもとにしている。ジャズのサウンドと、同時に対位法も取り入れ、荘重な趣で楽章を結ぶ。

第2楽章　アンダンティーノ　ハ長調に始まり、金管楽器とヴァイオリンの短いモチーフののち、チューバ独奏が伸びやかなモチーフを表わす。ト長調のチェレスタと弦楽器などによるチャーミングな楽想を経て、ホルン独奏のカデンツァが現われる。力強くト長調で締めくくられたのち、ホルン独奏が冒頭のハ長調のモチーフをエコーのように鳴り響かせる。

第3楽章　アレグロ・モルト　3拍子の舞曲風のフィナーレ。オーケストラの軽快な導入ののち、チューバは愛らしい主題を鳴り響かせる。オーケストラとチューバ独奏との模倣的な対話ののち、楽章冒頭が再現される。舞踏を思わせる懐かしい響きとモダンなリズムやサウンドなどの融合した楽章。　〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：2018年／初演：2018年3月3日、アメリカ・カリフォルニア州／演奏時間：約15分
楽器編成／フルート2、ピッコロ（アルトフルート持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（小太鼓、中太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、ボンゴ、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、キーボード、弦五部、独奏チューバ

レスピーギ
交響詩〈ローマの祭〉

〈ローマの祭〉は、〈ローマ三部作〉の最後の作品で、1928年に書き上げられた。4曲からなり、古代ローマから20世紀までのローマの祭りが表現されている。

I. チルチェンセス　時は古代ローマ。暴君ネロが、民衆への見せ物として円形競技場で猛獣にキリスト教徒を襲わせる。冒頭、興奮する観客たちの声に続き、ブッキーナ（トランペットで代用）によるファンファーレが遠くから鳴り響く。観客が興奮するなか、弦楽器などによって聖歌が祈るように奏でられる。しかし、その背後からは唸（うな）るような猛獣の声が聞こえる。猛獣を表す金管楽器は、雄叫（おたけ）びのようなサウンドを吹奏し、残酷なリズムの連打と圧倒的な音量で曲を結ぶ。

II. 五十年祭　中世の「五十年祭」では、50年に一度、法王から大赦が与えられる。巡礼者は、モンテ・マリオの丘へ向かって歩いていく。冒頭の第1ヴァイオリンのモチーフや、クラリネットとファゴットが奏でる古い讃美歌のメロディは、歌い継がれ、微妙に形を変えて繰り広げられる。頂上に着いた巡礼者たちの目の前には、ローマの街が広がる。彼らの感動は壮麗な音楽によって表され、やがて教会の鐘が響きわたる。

III. 十月祭　ぶどうの収穫を祝う「十月祭」は、ルネッサンスの祭り。狩りを象徴する軽快なホルンの調べに始まり、それにトランペットが勇ましく応える。夕暮れが近づくと、第1ヴァイオリンがロマンティックなメロディを歌い、そのあとマンドリンが「セレナード」のメロディを紡（つむ）いでいく。

IV. 主顕祭　「主顕祭」は、3人の賢者がベツレヘムで生まれたばかりのキリストを礼拝した日を祝う祭り。20世紀初頭のローマの民衆の祭りで、その賑（にぎ）やかな様子が描かれている。その賑わいの中から、トロンボーン独奏は酔っぱらったようなメロディを吹く。曲中にはワルツやサルタレッロといった踊りの音楽も織り込まれ、音楽は華やかに結ばれる。　〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1928年／初演：1929年2月21日、ニューヨーク／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、D管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、中太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、タンブリン、鈴、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、鐘、タヴォレッタ）、マンドリン、ピアノ、オルガン、バンダ、弦五部

レスピーギ
交響詩〈ローマの松〉

交響詩〈ローマの松〉は1924年12月に完成し、その月のうちに初演された。

I. ボルゲーゼ庭園の松　ボルゲーゼ庭園の松林で遊んでいる子どもたちを描いている。まず、ファゴットとホルン、そしてチェロが主題を表す。曲中には、トリルやグリッサンド、素早いパッセージが多く用いられている。屈託ない明るさやはつらつとした表情、そしてすばやい音の動きは、楽しげに遊ぶ子どもそのものである。

II. カタコンブの傍らの松　カタコンブの入口を取り囲むように、松が立っている。カタコンブとは、古代キリスト教時代の地下墓地。圧（の）しかかるような弦楽器の響きに始まり、ホルンが古風な旋律を奏でる。曲を通して、重い足取りをイメージさせるリズムが印象的である。音楽は、転調によってうっすらと明るさを帯びた場面をはさみ、トランペットが美しいメロディを舞台裏から歌う。終盤、冒頭の陰うつな楽想が回帰し、神秘的に曲を結ぶ。

III. ジャニコロの丘の松　満月の光に照らされる松、そしてナイチンゲールの鳴き声が響き渡る。静けさの中、ピアノの煌（きら）めくような響きに導かれ、クラリネットがメロディを美しく歌い上げる。音楽は、夢想的な雰囲気に包まれている。曲の終わりには、楽譜上にナイチンゲールの鳴き声の録音を使う指示があり、当時としては非常に画期的な試みであった。

IV. アッピア街道の松　霧が立ち込める夜明けに、古代ローマ軍がアッピア街道の石畳の道を行進する様子が描かれている。「行進曲の速さで」と記されたこの曲は、超弱奏の足音にも似た響きで始まり、ピアノや低弦楽器などによって絶え間なくリズムが刻まれていく。導入ののち、イングリッシュ・ホルンがメロディを歌う。続いて、金管楽器も加わる。そこで、レスピーギは古代ローマの時代の楽器ブッキーナを用いるように指示している（本日はトランペットなどで代用し、舞台の外から演奏）。音楽は、壮麗に締めくくられる。　〈道下京子 音楽評論家〉

作曲：1923〜24年／初演：1924年12月14日、ローマ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、トライアングル、タンブリン、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロッケンシュピール、銅鑼、ラチェット、鳥の声）、ハープ、チェレスタ、ピアノ、オルガン、バンダ、弦五部

プローブスト
〈群雲〉（日本初演）

ドミニク・プローブスト（1954〜）はフランス出身の作曲家、打楽器奏者。パリ国立高等音楽院で打楽器を学び、1973年から2015年までコロンヌ管弦楽団の打楽器奏者および首席ティンパニ奏者を務めた。1978年にリリ&ナディア・ブーランジェ財団の作曲賞を獲得。バレエ、ラジオ、映画、テレビ、演劇のために数々の作品を手がけたほか、イヨネスコ台本による〈マキシミリアノ・コルベ〉をはじめ3作のオペラがフランス国内外で上演されている。大ピアニスト、ロベール・カサドシュらを輩出した高名な芸術家一家の出身で、母は女優のジゼル・カサドシュ、兄は本日の指揮者ジャン=クロード・カサドシュである。

オーケストラ作品では、この〈群雲〉が代表作のひとつと言ってよいだろう。オーケストラ・ネットワーク・フォー・ヨーロッパ（ONE）の委嘱で作曲され、エン・シャオ指揮スロベニア放送響により2014年に初演されて以来、モンテカルロ・フィル、マルセイユ歌劇場管、リール国立管、ポーランド・シレジア・フィルなど、欧州各地の楽団によりたびたび再演されている。

作曲にあたりインスピレーションの源となったのは「ヨハネ黙示録」21章の一節、「この御使（みつか）いは、わたしを御霊（みたま）に感じたまま、大きな高い山に連れて行き」。プローブストは「この曲は私たちをひどい冷たさから穏やかで親しげな温かさへと導く瞑想的な探求を描写しており、そこには癒しをもたらす目に見えない超自然的な存在がある。音楽は雄大な山から発せられる力強いオーラと、無限に広がる天空へと消えてゆく無数の雲の渦を表現している」と語っている。

曲はティンパニの強烈な短いソロで開始され、荘厳な総奏が続く。銅鑼の一撃の後、内省的な楽想がくりひろげられ、やがてリズミカルなコンガを伴って活発な曲調に転じる。最後に冒頭主題が回帰して、断ち切るように曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：2014年／初演：2014年10月9日、リュブリャナ（スロベニア）／演奏時間：約9分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、コルネット、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、ヴィブラフォン、笛、サンダーシート、クリケット、コンガ、銅鑼、クロテイル）、ハープ、弦五部

ラヴェル
ピアノ協奏曲 ト長調

1928年のアメリカ・ツアーの成功を受け、モーリス・ラヴェル（1875〜1937）は新たにピアノ協奏曲を作曲し、自らをソリストとした世界ツアーを計画した。翌年、ピアノ協奏曲の作曲中に、戦争で右腕を失ったパウル・ヴィトゲンシュタインから、左手のためのピアノ協奏曲を委嘱される。ラヴェルはこれを9か月ほどで書きあげると、ふたたび自身のためのピアノ協奏曲の筆を進めた。つまり、ラヴェルは両手のためのピアノ協奏曲と左手のためのピアノ協奏曲を並行して書いた。両者は対照的な性格を持ち、両手のためのピアノ協奏曲はより古典的だ。

ラヴェルはこう語る。「ふたつの協奏曲を同時に手がけることは興味深い経験でした。私自身がソリストを務めて初演する協奏曲は、厳密に言葉通りの意味での協奏曲です。つまり、モーツァルトやサン=サーンスの協奏曲と同じ精神で書かれているのです。私見では、協奏曲とは陽気で華麗なものであって、奥深さや劇的効果を狙うものではありません」

ところが、ラヴェルの健康状態が思わしくなかったこともあり、自身をソリストとする世界ツアーは実現せず、結局マルグリット・ロンをソリストに迎えてヨーロッパに限ったツアーが行われた。ピアノ協奏曲は華々しい成功を収め、第3楽章は各地でアンコールされた。

第1楽章　アレグラメンテ　鞭の打撃音で開始され、軽快な主題を奏でる。ジャズやスペイン音楽の影響をにじませながら、洒脱で多彩な楽想がくりだされる。

第2楽章　アダージョ・アッサイ　冒頭からしばらく、ピアノ独奏のみでノスタルジックな主題が淡々と奏でられる。高雅な詩情が漂う緩徐楽章。

第3楽章　プレスト　コミカルで狂躁的な雰囲気はまるでサーカスのよう。ピアノと管弦楽がエネルギッシュに躍動し、華やかなフィナーレを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1929〜31年／初演：1932年1月14日、パリ、サル・プレイエル／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、エスクラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、鞭、ウッドブロック、銅鑼）、ハープ、弦五部、独奏ピアノ

ベルリオーズ
幻想交響曲 作品14

1827年、イギリスの劇団による「ハムレット」を観劇したエクトール・ベルリオーズ（1803〜69）は、シェイクスピア作品の崇高さに胸を打たれるとともに、舞台女優のハリエット・スミッソンに熱い思いを燃えあがらせた。「彼女の演劇の才能がもたらす深い感銘は、シェイクスピアが与える衝撃にも匹敵する」。女優に理想化されたヒロイン像を見たベルリオーズは、熱心に彼女を追いかけ続けた。やがて充（み）たされぬ思いが苦しみへと変わると、作曲家は苦悩を芸術へと昇華させるかのように自伝的作品〈幻想交響曲〉を書きあげた。副題は「ある芸術家の生涯のエピソード」。鋭敏な感受性と豊かな想像力にあふれた若き芸術家が、恋に絶望してアヘンで服毒自殺を図るものの死には至らず、奇怪な幻覚を見るといった筋立てを持つ。

同時期にベルリオーズを触発したのは、アブネック指揮パリ音楽院演奏協会によるベートーヴェンの交響曲演奏会である。「ベートーヴェンは、シェイクスピアが詩の新しい宇宙を見せたように、新たな音楽の世界を開いてくれた」。ベルリオーズの関心は、オペラやカンタータなどの声楽曲から、器楽曲の分野に向けて広げられることになった。失恋体験とベートーヴェン体験の両者がこの〈幻想交響曲〉に結実したといえるだろう。

第1楽章“夢と情熱” 序奏に続く主部で、恋人を表す主題がフルートとヴァイオリンで奏でられる。この主題は形を変えて繰り返し登場する。**第2楽章“舞踏会”** ハープが活躍する華やかなワルツ。芸術家は舞踏会に集う人々に恋人の姿を探す。**第3楽章“野の情景”** イングリッシュ・ホルンと舞台裏のオーボエが羊飼いの笛の二重奏を吹く。ティンパニが遠雷を表現する。**第4楽章“断頭台への行進”** 恋人を殺して死刑を宣告された芸術家は断頭台にのぼる。**第5楽章“ワルプルギスの夜の夢”** 禍々（まがまが）しい魔女の夜宴。醜い姿に変わり果てた恋人がやってくる。弔（とむら）いの鐘が鳴り、「怒りの日」の主題があらわれる。乱痴気騒ぎがくりひろげられ、壮絶なフィナーレを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1830年／初演：1830年12月5日、パリ／演奏時間：約49分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2（エスクラリネット持替）、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル）、ハープ2、バンダ（オーボエ、鐘）、弦五部